

「シマ」と「アマ」、 「クニ」と「ウミ」 —— 日本的靈性の地政学

菅田正昭

いま、私たちが当然のものと考えている海や島の概念は、どのようにして成立したのか。海境の島々に対する無関心は、果たして何に起因するのか——。国・海・島をめぐる日本人の精神史を、記紀神話の世界から現代に至るまで、時空を越えた壮大な視点から鳥瞰を試みる。

古代の〈ウミ〉は 暮らしと結びついた水域だった

まず、生命の〈産み〉の母たる〈産腹〉^{うみばら}の〈海〉から始めよう。六〇年安保世代の同伴者、七〇年全共闘世代のイデオログとして知られる詩人・文芸評論家・思想家の吉本隆明氏（一九二四〜）は、『言語にとつて美とは何か』の中で、古代人が初めて海を見たとき、「海が視覚に反映したときある叫びを〈う〉なら〈う〉と発音するはずである」と書いている。吉本は民俗学者・国文

学者の折口信夫（一八八七〜一九五三）の卒業論文『言語情調論』（一九一〇）に影響されているが、〈うみ〉の語源を感動の〈言霊〉として捉えている。

反吉本主義者のように、これを「奇怪」のレットテルの下に退ける気はわたしにはないが、〈うみ〉の語源は「オホ（大）ミ（水）」である。すなわち、[ohomi] ↓ [ohmi] ↓ [oumi] と変化し、さらに [o] の音韻部分が脱落したものである。近江をオウミ、遠江をトオトウミ（トホタフミ）と訓むのは、都から見て「近つ淡海」（琵琶湖）——「遠つ淡海」（浜名湖）という距離感に発し

ている。ただし、『広辞苑』をはじめ多くの国語辞典は、オウミを淡水湖としてのアハウミ（淡水）↓アウミの転訛と考えているが、それは結果的に、そのように見えているだけで、実際はオホミ（大水）なのである。

むしろ、ここで注目しなければならぬのは、古代は国名にも使われた近江・遠江に象徴されるように、現代人の感覚では〈湖〉も〈うみ〉である、という点である。すなわち、『古事記』によれば、建御名方神が父神の大国主神と兄神の事代主神が「国譲り」に同意したとき、力競べをして最後まで反抗して敗れたあと、出雲国から逃げた先は「科野國之州羽海」（信濃國の諏訪湖）である。また、『常陸國風土記』には「江海」「騰波の江」（新治の鳥羽の淡海・『万葉集』巻九）「信太の流海、榎の浦の流海」「佐我的流海」…などの〈うみ〉が登場するが、今日の北浦や霞ヶ浦が一体化して鹿島灘の〈入り海〉となっていた状態を指している。さらに、神武東征ゆかりのチヌノウミ（記・血沼海、紀・茅渟海）は、瀬戸内海の延長としての、今日の大坂湾が深く広く湾入して《入り海》（河内湖の時代もあり）を形成していた頃の名称だ。近江國の琵琶湖や信濃國の諏訪湖はもろろん淡水湖だが、遠江國の浜名湖や、常陸國の「流海」の名残りの霞ヶ浦、そして茅渟海は本来は、海水も入り混じっていたはずである。今は茨城県稲敷市となっている霞ヶ浦の南部と接する「浮島」（旧・稲敷郡桜川村）は、昭和三十年

代の初めごろまでは霞ヶ浦に浮かぶ文字どおりの島だったが、『常陸國風土記』によれば、信太の流海に浮かぶ「塩を火きて業となす」孤島だった。したがって、オウミが淡水湖を意味するアハウミ⇨アウミの転と考えるのは、後世の〈賢しら〉なのである。

このことは何を意味しているのか。〈うみ〉がいわゆる湖や、汽水湖を指すものではない、ということである。すなわち、その広さ、大きさを認識できる範囲内のオホミを、古代人は〈うみ〉と呼んでいた、と想像することができる。いいかえれば、自分たちの生活と密接に結びついた〈大いなる水辺〉⇨オホミの範囲を〈うみ〉として捉えていた、ということになるだろう。

—— 広大な海を 古代人は「アマ」と呼んでいた

では、自分たちの視力や、肉体で把握（歩いたり舟を漕いだり）できない、もっと広く大きな汪洋とした（ウミ）は、何と呼ばれていたのであろうか。『常陸國風土記』はそれを「大海」という概念で捉えているが、この場合の「大海」は、〈うみ〉に漢字の「海」が充てられてからのことであろう。今日、我々が〈海〉と考えている対象⇨存在を、古代人は〈あま〉と呼んでいたはずである。もちろん、この〈あま〉は天と海の両義を持つている。

アマという語は、語源的には「ア」と「マ」の二語から成立していると考えられるが、「マ」のほうは明らかに「間」の義である。いっぽう、「ア」はまさに言素記号—音素番号（第1号）の、感動の語である。どちらかというところ「ウミ」の「ウ」が内側にくごもる傾向があるのにたいし、「ア」は外側へ発散していく。そこから強調的接頭語としての役割がでてくる。まさに、アマ（天）は感動が強調された〈空間〉なのである。

南北に長く連なる弧状列島に住む古代人は、天と海との茫漠たる境目を眺めていたにちがいない。そして、そこに神々の原郷としての、常世やニライカナイを想像してきたわけである。もちろん、その天とも海とも区別がつきにくい「アマ」の空間に、島影が浮かんで見えることもある。当然、その島影の〈島〉側からも同様の光景が眺められたことだろう。

不思議なことに、天から山へ神々が降臨することはしばしばであったが、天と山との「通い路」は閉ざされてなかったにもかかわらず、アマ（天）とヤマ（山）とは一見、接続しているように感じられていても、空間的には明確に峻別されていた。ところが、アマという同じ音韻を持つ〈天〉と〈海〉とは、ある意味では曖昧模糊としていて、空間としては渾然一体化していた。いいかえれば、海（アマ）は天（アマ）の一部であり、シマ（島）はこの〈アマ〉の靈性に包まれた聖空間だったというこ

とができる。というよりも、上古^{しよこ}神代の昔には、〈アマ〉はあっても〈海〉はなかった、といっても過言ではないのである。

「国生み神話」で 島々は〈アマ〉に誕生した

ところで、『古事記』本文の冒頭の部分に「次に國稚^{くにわか}く、浮かべる脂^{あぶら}の如くして水母^{みづも}なす漂へる」という記述がある。この場合の「國」は「陸地」の義だが、「天地の初発^{はしめ}」の次の段階では、まだ、それ（陸地の原型）が浮かんでいる脂のようにクラゲみたいに漂っていた、というのである。今日的感觉では、その「漂へる」場は〈海〉ということになるが、『古事記』に「海」という漢字が出てくるのは、イザナギの身褻^{みせき}の最後の段階で天照大御神・月読命・建速須佐之男命^{たけはらひのすけのみこと}のいわゆる三貴子（みはしらのうずのみこ）が生まれたとき、スサノヲにたいし「汝命^{いみまこと}は海原^{うみはら}を知らせ」とのイザナギの「言依^{ことよ}さし」があつた場面が最初である。

『古事記』文脈の流れからいうと、「漂へる国」の「修理固め」として、イザナギとイザナミの夫婦^{めとまぐはば}交合^{あひま}があり、いわゆる「国土^{くに}生み」が行われる。ふつう〈国土生み〉神話と呼ばれているが、実際は「島々の生成」であり、本当は〈島生み〉神話といふべきである。だが、ここには〈海〉はあらわれてこないのである。

すがたまさあき
菅田正昭

昭和20年東京生まれ。学習院大学法学部卒業。同46年から49年まで東京都青ヶ島村役場職員、平成2年から5年にかけて同村助役を務める。主著に『日本の島事典』（三交社）、『アマとオウー弧状列島をつらぬく日本の靈性』『隠れたる日本靈性史』（たちばな出版）、『古代技芸神の足跡と古社』（新人物往来社）ほか多数。現在、自身のホームページ「でいらぼん通信」で独自のシマ論を展開している。日本民俗学会会員。



すなわち、ギ・ミ両神は高天原の天の浮橋の上に立ち、そこから天の沼矛を降ろしてかき回すと、その矛の先から塩が滴り落ちて積もり「淤能碁呂島」が形成された。わたしたちは「塩」と「島」から「海」をイメージしてしまいが、「古事記」のこの場面にも「海」という字は登場しないのである。ギ・ミはこのオノゴロ島に降り立って、互いに声を掛け合って夫婦交合をして島々や神々を生む。しかし、最初に生まれた子・水蛭子と、その次の淡島は「女人先立ち言へるはふさわず」ということで「子の数」に入れられなかった。とくに、ヒルコの場合「葦船に入れて」流されてしまう。もちろん、ここにも「海」は出てこない。そして、このあと、いわゆる「大八島国の生成」がある。その順序を記すと――

- (1) 淡道の穂の狭別島（淡路島）
- (2) 伊豫の二名島（四国。伊豫國Ⅱ愛比賣、讃岐國Ⅱ飯依比古、粟國Ⅱ阿波Ⅱ大宜都比賣、土左國Ⅱ建依別）
- (3) 隱伎の三子島（天之忍許呂別）
- (4) 筑紫島（九州。筑紫國筑前、筑後Ⅱ白日別、豊國豊前、豊後Ⅱ豊日別、肥國肥前、肥後Ⅱ建日向日豊久士比泥別、熊曾國Ⅱ建日別）
- (5) 伊伎島（壹岐。天比登都柱）
- (6) 津島（対馬。天之狭手依比賣）
- (7) 佐度島（佐渡）
- (8) 大倭豊秋津島（本州。天御虚空豊秋津根別）
- さらに、そのあと、吉備児島（岡山県の児島半島。建日方別）と小豆島（大野手比賣、大島（山口県の周防大島。大多麻流別）と女島（大分県の姫島。天一根）、知訶島（五島列島。天之忍男）、兩兒島（長崎県の男女群島？ 天兩屋）の六島が生まれている。すなわち、〈島々〉には神や命の号は付いていないが、ギ・ミ両神の御子として出現しているのである。いうならば、〈島々〉は、半分は〈神〉なのだ。しかし、ここでも「海」の字は出てこない。ちなみに、吉備國の兒島では奈良時代に干拓が始まり、江戸初期の元和四年（一六一八）に半島化するまではその名のとおり島であった。いっぽう小豆島は今も香川県に属しているが元

来は吉備國兒嶋郡に属していており、兒島と小豆島は対の関係になっていた。

要するに、〈島々〉は〈海〉には誕生していないのである。大八島もその周辺の島々も〈天〉と〈海〉とが渾然とした〈アマ〉に発生しているのである。神話世界は現代人の時空構造とは違うのである。〈島々〉の出自は、どちらかといえば、アマとしての〈天〉にあるといえようか。平成九年、当時の国土庁が提案した「アイランド・テラピー構想」における〈島〉の〈癒し効果〉の〈癒し〉発生の根源は、〈天〉と〈海〉が一体となったこの〈アマ〉に起源するものと考えられる。いいかえれば、〈島〉はアマの靈性に包まれているのである。

島々の本義は

〈聖地〉から〈穢土〉に転化した

ここで、〈シマ〉と〈クニ〉の違いについて述べておこう。すでに、明らかのように、〈シマ〉は〈アマ〉に対応している。ここから〈クニ〉は〈ウミ〉に対応していると推測できる。すなわち、〈シマーアマ〉、〈クニウミ〉という関係が成り立つはずである。

わたしは、本誌二〇九号掲載の「日本人の精神性から見る『領有』意識の二つの形態―『しろしめす』と『うしはく』の違いの視点から―」の中で、次のように書いた。

〈民俗学者・国文学者の折口信夫（一八八七―一九五三）の『古代研究（民俗学篇2）』所収の「古代に於ける言語伝承の推移」によれば、「島は自分（天皇）が持っている国、治めている国の意味」であり、これにたいし「国は天皇に半分従属し、半分独立しているところであった」。この関係をもつと単純化すれば、島は天皇がもともと統治していた土地、国はのちに統治することになった土地ということになる。というよりも、わたしはその統治の主体としての主語を「自分たちが祭祀している神々」と置き換えるべきと考えている。すなわち、シマとは「わがカミガミの神威が及ぶ範囲の土地」のことであり、クニとは「異族の人びとが祀るカミガミの神威が及ぶ土地」ということになる。〉

このあと、わたしは日本の古語には統治・支配・領有を意味する語として、シロシメスとウシハクの二つがあることを指摘した。前者の語源は「知らず」であり、極端な言い方をすると、御幣を一本立ててその場で祭りを行えば、統治の〈知らせ〉をしたことになるのがシロシメスの本義である。いっぽう、ウシハクは「大人・佩く」あるいは「内・掃く」の義で、氏族の長としての大人が氏神の神威が及ぶ範囲を掃き清める、ということから生じたもので、シロシメスよりも実効支配を志向した統治であると推測した。詳しくは拙稿を読んでいただきたいが、このシロシメスとウシハクの間を、〈シマーアマ〉



「海の正倉院」沖ノ島に鎮座する宗像大社沖津宮。

と〈クニ―ウミ〉に適用してみると、〈シマ―アマ―シロシメス〉、〈クニ―ウミ―ウシハク〉ということになる。すなわち、シロシメスは信仰的・祭祀的な〈統治〉であり、ウシハクはいわゆる実効支配を伴った〈統治〉である。シロシメスの場合、自然の岩石に人の手を少し加えた磐座や、御神木を神籬として、その周りに注連縄を張り巡らせば、そこはもう立派な聖域である。祭りの期間やその前後は禁足地として一部の祭祀者以外は近づけないが、平地や山の麓の場合は草ぼうぼうの野原である。そこではこっそり野草や山菜を摘もうと、薪を拾おうと、恋人どうしが逢引をしようが基本的には自由

である。

山の中腹や頂上や、さらに島の場合も基本的には同じである。ただし、人びとが行きづらいだけである。しかし、そういう聖地では、足を踏み入れることじたいが畏れ多いものとして、禁足の状態が恒常化し固定化するところがある。その一つの典型が「海の正倉院」の異名を持つ玄界灘の沖ノ島である。島の全体が宗像大社の沖津宮の神域となっていて、現在は男性神職が日々の奉仕のため渡島し、一週間ごとに交代している。縄文時代の生活遺跡が発見されている（小規模の集落があったらしい）が、弥生期以降は奈良時代まで何か事あるごとに渡島して磐座の陰で祭りを行う形になっていた。

古くから女人禁制の島として知られ、男子といえども特別の場合以外は年に一度の現地大祭の時にしか渡ることができず、上陸に際しては素っ裸での海中褌が全員に課せられている。

現在、福岡県宗像市に属しているこの沖ノ島の場合には特殊な例と思われるかもしれないが、実は、シロシメス対象の土地としての〈シマ〉は、どこでも信仰的意味合いでの〈統治・領有〉の地であった。ところが、「大八島」最大の島である秋津島（本州）や、その内部の聖地としてのシマとその周辺の、住人たちに島々やシマジマに住んでいるという意識が希薄になっていく状況が現出して

くる。おそらく、古代ヤマト王権の確立に伴う祭政一致の、マツリ（祭祀）からマツリゴト（政治）への比重の転換と輓（わら）を同じくするものと思われる。

このとき、アマが〈天〉と〈海〉へ分離し、四方を〈海〉で囲まれていない元の〈シマ〉は己のシマ性とアマ性を忘れていく。シマの理念型である〈島〉は、アマの靈性から引き剥がされて〈海〉に囲まれてしまう。〈本土〉の〈離れ〉と化してしまうのだ。〈島〉への、ある種の差別性もここから生ずる。そんなところに住んでいるのがいけないのだ、という意識である。そして、そこに仏教の因果関係が適応される。不便な〈島〉に生まれ住むのは、前生の因縁（自己責任）というわけである。この関係は本土内であえて〈シマ〉の靈性を保持しようとした土地にたいしてもいえる。一般人にとつて禁足地である土地に特別に住んだり出入りできるのは、実は、〈聖地〉ではなく〈穢土（えど）〉だというのである。畏れ多くて遠ざけていた土地が持つ靈性の本義が忘れられて、〈穢土〉だから俗人は近づけないのだと逆に考えられるようになってしまったのだ。

日本人が従来、国境の海域に浮かぶ離島に無関心だったのは、こうした精神史から発している。その象徴的存在が竹島や尖閣列島や沖ノ鳥島などの問題である。かつて領土問題を論じようとすると、島はシロシメスものであってウシハクものではない、とする弧状列島住民の原



「御不言（おいわず）様」と呼ばれ、古くから祭祀によってしめされてきた宗像沖ノ島。

始心性の記憶を呼び覚ましてしまったのだ。わたしは日本人の、そうした心映えをゆかしきものとして肯定するが、その美しき国民性につけこむ連中がいるのも残念ながら事実である。

—— 霊性をともなった〈アマ〉を復権、 島々をしろしめせ

今日の問題は、島が〈アマ〉の霊性を持たないで、単なる原始心性のシロシメスのエポケー（判断の差し控え）状態になっていることだ。〈海〉に囲まれているだけで、そこには〈アマ〉の契機が欠落しているのである。いいかえれば、〈神〉抜き状態なのだ。周辺諸国では、海面下の暗礁でさえも、その場所が資源的に、あるいは地政学的に重要である場合、灯台やヘリポートを設置し、軍備を配置させている。わが国の場合、このようなウシハク統治は〈悪〉とみなされる傾向があるが、それならばシロシメス統治を行わなければならない。宗像の沖ノ島に象徴されるように、島神を齋き祀り、日々の、あるいは、最低でも年に二回ぐらいいは渡島して祭祀を行なえばよいのである。

わが国は政教分離の民主主義国家を自称しているため、それすらもなかなか行えないのが実情だ。実は昭和二十年の終戦以降は、日本の宗教団体は神社を含めて、基本的にはすべてが民間である。そして、憲法は信教の自由を保障している。民間人がシマのカミガミを祭ればよいのである。宗像大社の沖津宮はその典型でもある。

〈天〉と〈海〉の霊性の両方を兼ね備えた〈アマ〉を復権させなければならない。わが国の領海・領土なのに、日本には防空識別圏がないという地域（沖縄県与那国島の一部上空）が生じるのも、アマの霊性に関心がないからだ。実は、日本以外の諸外国は国家権力むき出しのシロシメス型の統治を行っている。もともと〈大陸〉系の諸国は海にはあまり関心を持っていなかったのが、今では〈海〉にたいしてもシロシメス型の統治を行おうとしている。日本だけが〈海〉や〈島〉に関心を持つことを、悪しき〈島国根性〉として退けているのだ。そういう教育を受けさせられてきたのである。アマの霊性を持った大八島 N i p p o n を取り戻すことが、実は、離島振興にもつながっていくのである。

